－田中直毅著「マネーが止まった」講談社 2008 年 12 月 22 日刊を読む－

## 農耕社会と狩猟社会とは

(１)いまからもう四半世紀前になるが、オーストラリアのある博物館を訪れたときに読んだ、文化人類学者が中学生程度向けに書いた農耕民族と狩猟民族の違いについての記述を思い出す。

(２)農耕社会では、仕事の持ち場においては、分業が前提となる。

(３)これに対して狩猟社会は主に専業であり、狩猟民には多機能が要求される。

(４)つまり農耕社会ではかなり組織立った仕事のやり方が必要となるため分業が入り込み、それぞれに持ち場が存在するのに対して、狩猟社会では獲物が集中的に分布するわけではなく、いわばニッチの場において個人として獲物に対峙することとなる。

(５)したがって、たとえば弓と矢、斧などの道具を整備するのも、また獲物と対峙するのも、獲物を捕らえたあとで皮を剝ぎ、肉を貯蔵するのも、基本的にはすべて一人で行うことが前提なのだ。もちろん場合によっては何人かの単位で行うこともあり得るだろうが、基本は、道具の整備から獲物との格闘、そして獲物の解体から保存までのすべての過程を一人で行うのである。

(６)こうした分類は、その他の属性の差異にもつながる。

(７)農耕について言えば、自然を克服し、定期的な収穫を上げるためのマネジメントが必要となり、環境に対する働きかけという意味での人為性が前提となる。さらにこうした領域の中で、ある種、意見のとりまとめや方向づけが必要となり、いわば政治行為が登場する。また、持続性を前提とした手法が次々に導入されるとともに、取り分の配分基準については、平均値というものがついてまわることとなるだろう。

(８)これに対して狩猟はどうか。

(９)狩猟は環境に対する働きかけの要素が小さい。獲物に対してどのような位置からどのような手法でもって仕留めるかについても、自営業者の色彩が強い。そして、特定の瞬間に集中力を発揮せねばならず、また、獲物を取り押さえるという意味での個人的な力量も要求される。

(10)当然のことながら報酬は成功報酬であり、そこでは平均値を議論する余地は存在しないだろう。獲物が現れないことが続けば、家族は飢えさえも覚悟せねばならなくなる。

(11)また、政治的な意思決定に相当するものもない。環境に対する働きかけは基本的に必要なく、ある種、偶然に支配された状況における経営体の維持と言えるだろう。

(12)重要なことは、どこかで神の意思を聞く、というくらいの平明なる状況の受け入れだ。仕事に集中するときと、仕事を見送るべきときとを判別するためにも、神の意思を聞くがごとくの集中力が求められるのだ。

(13)農耕社会にあっては、長老支配はありうるが、狩猟社会にあっては、自らの足で立ち、獲物に向かい、そして仕留める技量だけが、現役かどうかの尺度である。退役はいやでも自分で決めることになろう。P143 ～ 145 より引用

― 2008 年 12 月 31 日記―